

本の匂いと手ざわり

新しい本を開く時、微かながら匂いが辺りに広がる。とくに洋書の場合には、なぜか知らないが、和書とは違った一種独特の強い香りがある。書物にはこのほか重さ、紙質、全体としての手ざわりなどにも明らかにそれぞれ個性がある。

何を学んだか、ということもさることながら、目で見て手で触れた場合にどのような印象をもった書物から学んだか、ということが記憶の中で案外大きな意味をもっているように思う。また、その本を図書館で読んだ場合には、その雰囲気や図書館の匂いが本の内容と一緒に頭で記憶される（勉強するのは単に視覚によってではなく五感によってなされる）という不思議なメカニズムがあるような気がしてならない。

大学図書館の匂い

もう五年も前になるが、米国のペンシルバニア大学で一年間教壇に立つ機会があった。たまたま大学院時代にもこの大学に在籍したので、およそ十五年振りの訪問であった。懐かしいキャンパスに到着、そして大学図書館に入って驚いた。この図書館独特の空気とぷーンとした匂いは、十五年前と少しも変わっていなかった。しかも、その匂いに触れた瞬間、ここで読んだ本や論文のいくつか、パッと頭の中に瞬時に甦った。そして、かつて学んだ科目やその講義担当の先生方の顔、さらには当時手掛けていた課題なども一緒になって十五年前の記憶が一瞬のうちに呼びさまされた。実に不思議な体験であった。

大学の図書館がどういうものであったか、そしてどういう書物（知識媒体）を手にして学んだかは、学生にとって後々まで大きな意味を持つように思う。

新時代の図書館とその「匂い」

慶應大学の湘南藤沢キャンパス（SFC）では、図書館（といわずメディアセンターと称するが）はキャンパスの文字通りど真ん中にあり、それを取り巻くかたちで教室や研究室が周囲に配置されているので、前述した点の認識の確かさは誇りうらと思う。また、知識や情報の保管や伝達は、紙の上にインクを乗せた媒体（グーテンベルグ以来の伝統的技術）によるよりも今後は電子媒体が中心になってくるとの思想から、この建物の一階には図書は一切置かず、小型コンピューター（ワークステーション）のみが一面に配置されている。ここは、情報検索やレポート作成にいそしむ学生でいつも賑わっており、SFCらしい時代先取りの姿がうかがわれる。一方、書籍は二階以上のフロアーに配架されている。

この新しいタイプの図書館であるメディアセンター（以下MCと略記）では、そこに配置された機器類などから何らかの特有の空気と匂いを醸し出すようになっているのだろうか。筆者は、余りにも日常的にそこに出入りしていることから、まだ特にそれを感じたことはない。匂いといえば、MCというよりもむしろSFCの匂い（むしろ臭いと書くべきか）の方がよく話題になる。SFCの周囲は農場が多く、風向きの如何では畜舎から来る有機質のにおいが辺り一面を覆うことが少なくない。こういう時には、SFCは正に牧歌的環境にあるにあるとの実感を抱くことになる。

しかし、これとは別にSFCメディアセンターに独特の匂いがあっても悪くはない

と思う。この場合、必ずしも嗅覚で感じる匂いに限定する必要はなく、五感全体で感じる雰囲気といったものを大切に考えたい。MCは単にコンピューターの画面と向き合う場所としてではなく、保守的な考え方もかもしれないが、読書に全身集中できるようなスペース、あるいは読書やコンピューター作業のあとゆっくりと過ごすことのできる静かで大きなスペースを提供する場所としても位置づけたい。

そうしたスペースが確保され、静かに考える時間を持つことによって、アイデアが閃き、また勉学成果も頭の中に定着しうるのではないか。SFCのメディアセンターは、そうした観点からみても理想的といわれる場所へと発展していったほしいと思う。

(慶應義塾大学「メディア・ネット」誌、第三号、一九九五年)